

第2部・基本的な微分方程式 2階線形微分方程式(2)

浅野 晃
関西大学総合情報学部



2階線形微分方程式(復習)🤔

2階線形微分方程式

一般には $x'' + P(t)x' + Q(t)x = R(t)$

ここが恒等的に0なのが[齊次]
そうではないのが[非齊次]

一番簡単なのは $x'' + ax' + bx = 0$ 定数係数の齊次方程式

とりあえず, $x \equiv 0$ は解**[自明解]**

それ以外には?

2階線形微分方程式の解

とりあえず $x'' + ax' + bx = 0$ に $x(t) = e^{\lambda t}$ を代入すると

$$\lambda^2 e^{\lambda t} + a\lambda e^{\lambda t} + b e^{\lambda t} = 0$$

$$(\lambda^2 + a\lambda + b) e^{\lambda t} = 0$$

ここが 0 になるような λ については
 $x = e^{\lambda t}$ は解, その定数倍も解

λ の2次方程式だから, みたす λ はたいてい2つ λ_1, λ_2

一般解は $x = C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 e^{\lambda_2 t}$ $x \equiv 0$ を含む

2階線形微分方程式を解く

$$x'' + ax' + bx = 0$$

定数係数の
齊次形2階線形微分方程式

$\lambda^2 + a\lambda + b = 0$ をみたす λ について $x = e^{\lambda t}$ は解
特性方程式という

特性方程式の解の形によって、3パターン

異なる2つの実数解の場合

異なる2つの虚数解の場合

重解の場合

虚数解が2つの場合

一般解は $x(t) = C_1 e^{(\alpha+i\beta)t} + C_2 e^{(\alpha-i\beta)t}$

さらに計算すると

$$\begin{aligned} x(t) &= C_1 e^{(\alpha+i\beta)t} + C_2 e^{(\alpha-i\beta)t} \\ &= e^{\alpha t} \left(C_1 e^{i\beta t} + C_2 e^{-i\beta t} \right) \\ &= e^{\alpha t} (C_1 (\cos(\beta t) + i \sin(\beta t)) + C_2 (\cos(\beta t) - i \sin(\beta t))) \\ &= e^{\alpha t} ((C_1 + C_2) \cos(\beta t) + i(C_1 - C_2) \sin(\beta t)) \end{aligned}$$

オイラーの式
 $e^{i\theta} = \cos \theta + i \sin \theta$ による
(また先で)

定数を置き直して、一般解は

$$x(t) = e^{\alpha t} (C_1 \cos(\beta t) + C_2 \sin(\beta t))$$

振動を表している (次の第3部で)

実数解が2つの場合

特性方程式の
異なる2つの実数解 λ_1, λ_2

微分方程式の
1次独立な解 $e^{\lambda_1 t}, e^{\lambda_2 t}$

$$\text{一般解は } x(t) = C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 e^{\lambda_2 t}$$

(つまり、最初のとおり)

重解の場合

ふつうにやると、微分方程式の解は $C_1 e^{\lambda_1 t}$ しか出て来ない

これと1次独立なもうひとつの解は $t e^{\lambda_1 t}$

確かめるため、解を微分して、微分方程式に代入してみる

$$\begin{aligned} (t e^{\lambda_1 t})' &= \lambda_1 t e^{\lambda_1 t} + e^{\lambda_1 t} = (\lambda_1 t + 1) e^{\lambda_1 t} \\ (t e^{\lambda_1 t})'' &= \lambda_1 (\lambda_1 t + 1) e^{\lambda_1 t} + \lambda_1 e^{\lambda_1 t} = (\lambda_1^2 t + 2\lambda_1) e^{\lambda_1 t} \end{aligned}$$

微分方程式の左辺に代入すると

$$\begin{aligned} &(\lambda_1^2 t + 2\lambda_1) e^{\lambda_1 t} + a\lambda_1 t e^{\lambda_1 t} + b t e^{\lambda_1 t} \\ &= \{\lambda_1^2 + a\lambda_1 + b\} t e^{\lambda_1 t} + (2\lambda_1 + a) e^{\lambda_1 t} \end{aligned}$$

λ_1 は特性方程式の解
だから0

特性方程式の
解と係数の関係により0

一般解は
 $C_1 e^{\lambda_1 t} + C_2 t e^{\lambda_1 t}$

見つけ方は前回のテキストで
(定数変化法)

非齊次形 2階線形微分方程式

非齊次形2階線形微分方程式

前回のは $x'' + ax' + bx = 0$ 定数係数の齊次方程式

今回は $x'' + ax' + bx = \underline{R(t)}$
[非齊次]tの式

非齊次形2階線形微分方程式

前回のは $x'' + ax' + bx = 0$ 定数係数の齊次方程式

今回は $x'' + ax' + bx = \underline{R(t)}$ [非齊次]tの式

結論からいうと

非齊次形の一般解 =
非齊次形の特殊解なにかひとつ(何でもいい)
+ 対応する齊次形の一般解

一般的にいうと

$x'' + P(t)x' + Q(t)x = R(t)$ を, $x_1 = x, x_2 = x'$ とおいて

$$\begin{aligned}x'_1 &= x_2 \\x'_2 &= -Q(t)x_1 - P(t)x_2 + R(t)\end{aligned}$$

行列で $\begin{pmatrix} x'_1 \\ x'_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -Q(t) & -P(t) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} 0 \\ R(t) \end{pmatrix}$

$$x' = A(t)x + b(t)$$

1階線形微分方程式の形になる
何階線形微分方程式でも, この形にできる

一般的にいうと

非齊次形 n 階線形微分方程式

$x' = A(t)x + b(t)$ の一般解 $x_s(t)$ は

非齊次形方程式

$x' = A(t)x + b(t)$ の任意の特殊解 $x_p(t)$ と

対応する齊次形方程式

$x' = A(t)x$ の一般解 $x_h(t)$ の 和で表される。

$$x_s(t) = \underline{x_h(t)} + \underline{x_p(t)}$$

何階微分方程式でも

定数係数でなくても

証明は、割と簡単

まず $x_s(t) = x_h(t) + x_p(t)$ が

非齊次形方程式 $x' = A(t)x + b(t)$ の解であることを確かめる

右辺に $x_s(t) = x_h(t) + x_p(t)$ を代入

$$A(t)x_s(t) + b(t)$$

$$= A(t)(\underline{x_h(t)} + \underline{x_p(t)}) + b(t)$$

$$\text{齊次形 } x' = A(t)x \quad \text{非齊次形 } x' = A(t)x + b(t)$$

$$= (\underline{A(t)x_h(t)}) + (\underline{A(t)x_p(t)} + b(t))$$

$$= (\underline{x_h(t)})' + (\underline{x_p(t)})' = (\underline{x_s(t)})'$$

(左辺)

本当に一般解か？

どんな初期値に対する特殊解でも表せるか？

証明は、割と簡単

どんな初期値に対する特殊解でも表せるか？

非齊次形方程式 $x' = A(t)x + b(t)$ の一般解 $x_s(t)$ について
任意の初期値 $x_s(t_0) = x_0$ を考える

このとき、対応する齊次形方程式 $x' = A(t)x$ の一般解 $x_h(t)$ について

初期値を $x_h(t_0) = x_0 - x_p(t_0)$ にとれば

$$\begin{aligned} x_s(t_0) &= x_h(t_0) + x_p(t_0) \\ &= (x_0 - x_p(t_0)) + x_p(t_0) \\ &= x_0 \end{aligned}$$

だから、これで
非齊次形方程式の解で初期値を $x_s(t_0) = x_0$
としたことになっている

この齊次形方程式は一意だから、

齊次形方程式でこの初期値の特殊解はひとつ 非齊次形方程式の特殊解もひとつ

例題

非齊次形2階線形微分方程式

前回のは

$$x'' + ax' + bx = 0 \quad \text{定数係数の齊次方程式}$$

今回は

$$x'' + ax' + bx = R(t) \quad \text{[非齊次]tの式}$$

結論からいうと

非齊次形の一般解 = これを見つけるには、右辺の形に注目
非齊次形の特殊解(のひとつ)は かひとつ(何でもいい)
+ 対応する齊次形の一般解

2023年度秋学期 応用数学(解析) / 関西大学総合情報学部 浅野 光 17 | 25

例題

$x'' + 2x' - 3x = 3t^2 + 3t - 2$ の一般解を求めよ。

非齊次形の特殊解(のひとつ)は $x = -t^2 - \frac{7}{3}t - \frac{14}{9}$

対応する齊次形の方程式は $x'' + 2x' - 3x = 0$

特性方程式は $\lambda^2 + 2\lambda - 3 = 0$ その解は $\lambda = 1, -3$

異なる2つの実数解なので、齊次形方程式の一般解は $x = C_1 e^t + C_2 e^{-3t}$

以上から、与えられた非齊次形方程式の一般解は

$$x = C_1 e^t + C_2 e^{-3t} - t^2 - \frac{7}{3}t - \frac{14}{9}$$

2023年度秋学期 応用数学(解析) / 関西大学総合情報学部 浅野 光 19 | 25

例題

$x'' + 2x' - 3x = 3t^2 + 3t - 2$ の一般解を求めよ。

特殊解を、 $x = at^2 + bt + c$ と見当をつける

これを元の方程式に代入して整理すると

$$-(3a + 3)t^2 + (4a - 3b - 3)t + (2a + 2b - 3c + 2) = 0$$

これが t に関係なくなりたつから

$$\begin{cases} 3a + 3 = 0 \\ 4a - 3b - 3 = 0 \\ 2a + 2b - 3c + 2 = 0 \end{cases} \quad \text{これを解くと } a = -1, b = -\frac{7}{3}, c = -\frac{14}{9}$$

非齊次形の方程式の特殊解(のひとつ)は $x = -t^2 - \frac{7}{3}t - \frac{14}{9}$

2023年度秋学期 応用数学(解析) / 関西大学総合情報学部 浅野 光 18 | 25

例題

$x'' + 2x' - 3x = e^{2t}$ の一般解を求めよ。

特殊解を、 $x = ae^{2t}$ と見当をつける

これを元の方程式に代入して整理すると

$$4ae^{2t} + 2 \cdot 2ae^{2t} - 3ae^{2t} = e^{2t} \quad \text{これが } t \text{ に関係なくなりたつから } a = \frac{1}{5}$$

非齊次形の方程式の特殊解(のひとつ)は $x = \frac{1}{5}e^{2t}$

対応する齊次形の方程式は $x'' + 2x' - 3x = 0$ 一般解は $x = C_1 e^t + C_2 e^{-3t}$

以上から、非齊次形方程式の一般解は $x = C_1 e^t + C_2 e^{-3t} + \frac{1}{5}e^{2t}$

2023年度秋学期 応用数学(解析) / 関西大学総合情報学部 浅野 光 20 | 25

例題

$x'' + 2x' - 3x = 2\cos t$ の一般解を求めよ。

特殊解を, $x = A\cos t + B\sin t$ と見当をつける

これを元の方程式に代入して整理すると

$$(-4A + 2B - 2)\cos t + (-2A - 4B)\sin t = 0 \quad \text{cos, sinは独立(あとで説明)}$$

$$\begin{cases} -4A + 2B - 2 = 0 \\ -2A - 4B = 0 \end{cases} \quad A = -\frac{2}{5}, B = \frac{1}{5}$$

非齊次形の方程式の特殊解(のひとつ)は $x = -\frac{2}{5}\cos t + \frac{1}{5}\sin t$

対応する齊次形の方程式は $x'' + 2x' - 3x = 0$ 一般解は $x = C_1e^t + C_2e^{-3t}$

以上から, 非齊次形方程式の一般解は $x = C_1e^t + C_2e^{-3t} - \frac{2}{5}\cos t + \frac{1}{5}\sin t$

2023年度秋学期 応用数学(解析) / 関西大学総合情報学部 浅野 光 21 | 25

関数の1次独立とWronskian

関数の1次独立とWronskian

関数 $x_1(t)$ と $x_2(t)$ が1次独立とは,

$C_1x_1(t) + C_2x_2(t) = 0$ がどんな t についてもなりたつなら, $C_1 = C_2 = 0$

ところで $C_1x_1(t) + C_2x_2(t) = 0$ を t で微分すると $C_1x'_1(t) + C_2x'_2(t) = 0$

まとめて行列で書くと $\begin{pmatrix} x_1(t) & x_2(t) \\ x'_1(t) & x'_2(t) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} C_1 \\ C_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$

解が $C_1 = C_2 = 0$ だけになるのは, この行列に逆行列が存在する時

$$\text{つまり } \begin{vmatrix} x_1(t) & x_2(t) \\ x'_1(t) & x'_2(t) \end{vmatrix} \neq 0$$

Wronskianという

2023年度秋学期 応用数学(解析) / 関西大学総合情報学部 浅野 光 23 | 25

関数の1次独立とWronskian(例)

関数 $x_1(t)$ と $x_2(t)$ が1次独立とは,

$C_1x_1(t) + C_2x_2(t) = 0$ がどんな t についてもなりたつなら, $C_1 = C_2 = 0$

cos t と sin t は?

Wronskianは $\begin{vmatrix} \cos t & \sin t \\ -\sin t & \cos t \end{vmatrix}$

$$\begin{vmatrix} \cos t & \sin t \\ -\sin t & \cos t \end{vmatrix} = \cos^2 t + \sin^2 t = 1 \text{ で, Wronskianが0でないので,}$$

cos t と sin t は1次独立

2023年度秋学期 応用数学(解析) / 関西大学総合情報学部 浅野 光 24 | 25

今日のまとめ

定数係数・非齊次形の
2階線形微分方程式

$$x'' + ax' + bx = \underline{R(t)}$$

非齊次形の一般解 =

非齊次形の特殊解なにかひとつ(何でもいい)

+ 対応する齊次形の一般解 これを見つけるには右辺の形に注目

$$x'' + ax' + bx = 0$$